

「てくり」創刊のこと。

「てくり」が創刊されたのは2005年の春。実は、思いつきから段取りまで含めれば4年越して実現した企画だった。

創刊時のメンバーは6人。現在居る木村（デザイナー）、赤坂（ライター）、水野（ライター）に加え、「ほにほにラチオ（ラチオもりおか）」のパーソナリティを務める大関（現在育休中／ライター・アナウンサー）、仕事や家の事情で他県へ移り住んでしまった2人がいた。

そもそも、何か仕事以外に主張できる冊子をつくろうと集まったのが、2001年の夏。その経緯はこれまで数々の取材で説明してきたが、要は、某行政外郭団体の勧めで「横のつながりを生かして何かやったら」という、志をくすぐる話にまんまと乗った純粋な奴らが、点けてしまった心のエネルギーを昇華すべく「てくり」始めたのが「てくり」なのである。当時は皆、30代だった（ちなみに点火をしていなくなった滝沢さんは、その後仙台の（有）荒蝦夷で編集者として活躍中です）。

広告冊子の誌面や地元の印刷物制作をまかされることは多いが、フリーのライターやデザイナーが出版社でもないのに版元になる機会はその多くない。大抵は「できたらいね」で終わりがちな話だが、メンバーが一緒にした仕事のギラが、ちょうど冊子1000部印刷代ほど残っていたのは、大きな後押しだったと、今になって思う。

ひとまず継続は考えず、「豆腐消費量日本一の県庁所在地・盛岡」をウリにした冊子をつくろうかと各方面に営業をかけたつもりでしたが、いい話にはならず。結局、取材やデザイン費は手弁当でつくる覚悟をした。が、その分、内容も部数も販売場所も自由に決められたことが、細々ながら10年続いた大きな理由かもしれない。手本は、大橋歩さんが発行していた「アルネ」だった。

創刊号は、それぞれのアイデアや企画を持ち寄り、喫茶店「六分儀」の奥に陣取り、数時間にわたってあれやこれや話したのを記憶している。その中に見つけた共通の切り口が「川」だった。プレスリリースされた当時の新聞記事などをみると、「新世代ミニコミ誌」なんて表現されたりもしたが、同時期に全国各地で同様の冊子発刊が重なり、「リトルプレス」というシュツとした言葉がいつしか生まれていた。その頃、リトルプレスを紹介する本や企画も徐々に増え、おかげで「てくり」もずいぶん全国誌で紹介していただいた。

——伝えたい、残したい、盛岡の「ふだん」を綴る本——をキャッチフレーズに。てくてくよりも、ゆつくりとした目線で「てくり」と名付けて、早10年。スタッフの歩みも冗談抜きの「てくり」になっ
ていくのが心配な、この頃だ（苦笑）。

「続けること」

手前味噌ではありますが、節目の振り返り企画です。10年の間、あなたにはどんな事がありましたか？

